

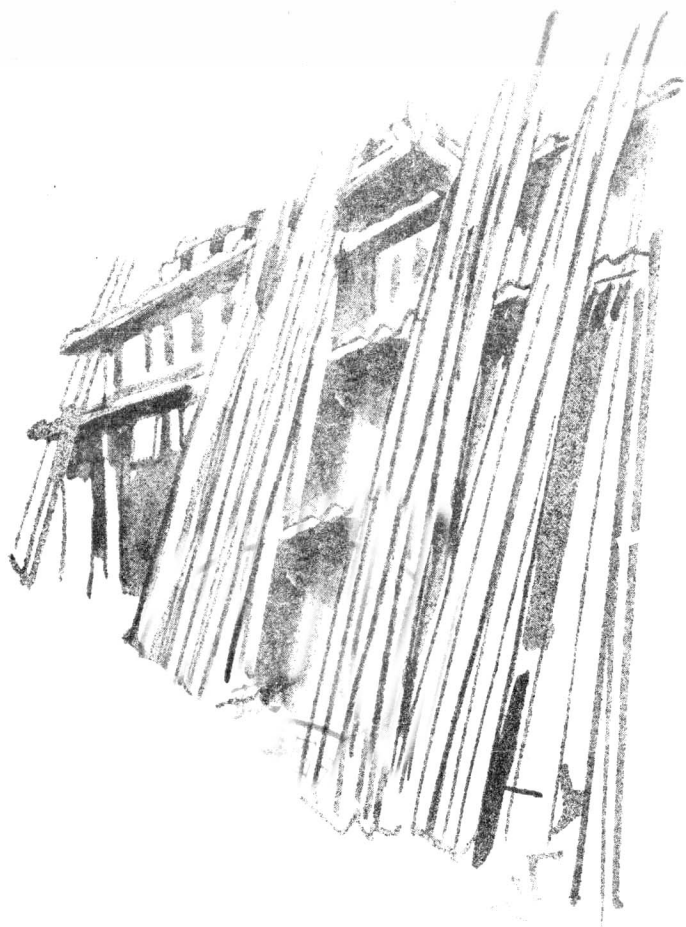
曰子屋駒子 上卷

舟橋聖一

白子屋駒子

上卷

舟橋聖一



昭和35年9月5日 初版発行

白子屋駒子 上 二九〇円

著 者 舟橋 聖一

発 行 者 角 川 源 義

印 刷 所 中光印刷株式会社

製 本 所 株式会社鈴木製本所

発 行 所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見町二
振替 東京一九五二〇八番

落丁・乱丁本はお取替え致します

白子屋駟子上卷

目次

恋の猫 永代暮色 さくろ口 女 狐 忍び駕籠 野郎帽子 吉宗人氣 白魚の指 江戸羊羹 勇み肌 江戸の華 白い稲妻 今日の日 びいどろ鏡

一一三 一〇五 九六 八八 八〇 七二 六四 五六 四八 四〇 三二 二四 一五 七

お七の煙り	一二〇
お梅女郎	一二八
橋の小鴉	一三六
山谷の梅	一四四
春のささめき	一五二
格子の雨	一六〇
そらどけの雪	一六八
川風夜風	一七六
道行かぶり	一八四
紅ばな緒	一九一
ある似顔	一九九
石町の鏡	二〇七
相思の人	二一五
肱まくら	二二三

装幀

福田豊四郎

白子屋駒子 上卷

びいどろ鏡

一

お常はさっきから、鏡に写る自分の顔を見ているよう
な振りをして、実は自分の背ろに立っている髪結の清三
郎の顔を見ていた。それで時々、鏡の位置を変えた。

ほんのちょっと、位置をずらすと、自分の肩越しに、
男の顔が写ってくる。然し、あんまり長く見つめている
と、息がはずんで来そうになるので、また元へ戻してお
くのだ。

鏡面には南蛮渡りの水銀が掛けてあるので、普通の鏡
よりは、ずっとはつきり写る。下の台も組立式になって
いて、三つも四つも抽斗があり、光沢のいい黒漆塗に金
時絵が散らしてあった。また、左右に蠟燭立がついてい
て、夜分の役にも立つようになっていた。

こんな贅沢な鏡台は、新材木町はおろか、日本橋一円
きって、見たことがないと云うのが、清三郎のお世辞た
が、まんざらの出鱈目でもない。

「でもねえ、清さん。長崎へ行くと、びいどろ鏡とい
うのがあるそうじゃアないか。あたしも、一度、そのび
いどろ鏡とやらで、清さんに髪を結って貰いたいよ」

「びいどろ鏡なんて、まだ大名屋敷にも、ないそうでござ
いますよ」

清三郎は缺で、

パチ、パチ、と、元結を切った。

「清さん。お前さんは一体、幾つなの？」

「私でございますか。幾つほど見えますか」

「それがわかる位なら、何も訊きはしませんよ」

「へい。恐れ入ります」

「おかみさんがあるそうだから、いくら若いって知
れてるね」

「そんなものは、ありやアしませんよ」

「あら、女中たちが、清さんには、恋女房がいるって、
噂をしてましたよ」

「しがない髪結渡世でございますもの、女房なんぞ、持

てません。下剃しもぎの勝が一人、いるだけでさ。昔から、髪結のことは、一銭職と云う位で——」

「でも、そうして、粋かっこな恰好かっこうをして、台箱をさげて歩いていると、どう見ても一銭職とは見えないから安心おしなさいよ」

「それにしても、私も下剃からやりましたが、女の髪を結ったのは、おかみさんがはじめてでございますよ」

「だから、こうしてほんの内証に結って貰いますのさ」

「ほんとにおかみさん、黙もくっていて下さいましよ。髪結かみむすの御法度ごほうどですから」

その証拠に、この残暑のさ中、表に向いた窓の障子は、しめてある。

「でも吉原の花魁かゐたちは、みんな廊くどの髪結に結い上げて貰うそうだから、町家の女房が、髪を結って貰っても、まさか罰は当りますまいよ。今にきつと、自分で髪を結う女なんて、江戸にはいなくりますよ」

「そうなると、こちとらの商売は、助かります。その代り、女には女髪結が出来るかも知れませんかえ」

「こんどは、一度娘の髪も結ってみて下さいよ」

「何ンですって……あのお嬢さんの……とんでもない」

「いやなの？」

「いやなんて云っちゃア冥利みょうりにつきるが、何しろ若い娘さんの髪なんて、撫なでつけてもみたことがねえンです。まア一つ、おかみさんだけってことにして戴きましよ」

清三郎は、たとえ母子おやこにしろ、女ごころの本質を、よく知っていた。

二

髪結のことを一銭職と云った謂われは、昔、龜山天皇の文永年間、北小路宋女うめのおとめ介が、その父を養おうとして、髪結職となった。その七代の孫藤七郎が、家康いえやすのために、髪を結い、当座の賞として、金一銭を受けたのがそのはじまりだという。

その後下つて、寛永の頃には、江戸に髪結職がひじょうに増えたので、幕府が鑑札を下ろすことになった。ところがそれも一ツ時で、又々、モグリ営業が盛んになったから、明暦めいれきと万治まんじの二回にわたって取調べがあり、江戸八百八町やちやうにつき、髪結床は一町一軒の定めを布いた。それで八百八株の髪結株が出来、一か年に師匠は二両、

弟子は一両の札銭をとった。つまり税金だ。そんなにまでして、制限を加えても、髪結渡世は増える一方であつたらしい。中にはずい分いかわしいもの、やくざ半分の髪結もあった。また、髪結床は、長のれん、四尺二寸。縫下五寸。かがみ障子三尺あまり等の掟があつた。

もっとも、髪結には、式亭三馬の「浮世床」にあるような店舗をかまえて営業する床屋と、台箱をさげ、屋敷や店を廻って歩く廻り髪結の二種類があつた。台箱の中には、梳き櫛三種、フケ取りの唐櫛、刷毛こき、髪かき、髻棒、毛受板、鬢盤、クセ直し、剃刀、砥石などが入つていた。清三郎は、その廻り髪結である。

今、お常の話にもあつたように、江戸の髪結は主として男の髪を結うのが目的で、女は大い自分で結うのが普通だつた。もっとも大奥や廊は例外である。市井の女が、他人に髪を結って貰うようになったのは、安永の末頃からで、それも男の髪結の手で結った。女で女髪結を渡世とするようになったのは、更に下って寛政頃からと云われる。然し、女髪結の半分は、風儀の悪い岡場所を渡り歩いて、どちらが本職ともつかぬようなのが多くなつたので、天保の改革で、一旦は厳禁された。

——お常は髪が結い上つたので、一服し、清三郎の煙管にも、火をつけてやりながら、

「ねえ、清さん。うちの駒子は、いつまでも、ねんねえで困つたものさ」

「おんば日傘で、あんまり大事にしなざるからですよ」

「あれでもう二八だと云うのに、男の話をしても、ソッポを向いちやつて、ろくに聞こうともしないンだもの」

「何しろ、白子屋さんは、躰がお堅いからさね……」

「おかげさんで、主人はあの通りの堅物だし、今までに一度も、浮いた噂がないのだから、駒子にも、悪い虫はつきたくありませんのさ」

「そんな心配は、御無用ですよ。お嬢様は、あれでなかなか、目が肥えておいでだから、減多な男には、気を許したりはなさいません。同じ材木間屋でも、増田屋さんなんかは、年中そんな話で、ごつた返しでございますよ」

お常は、あらわに興味をもやして、

「また何か、あつたのかえ」

「へい。若旦那の太郎吉が、出入りの左官の娘に手をつけて、お定まりの駈落ち。今のおかみさんと、なさぬ仲だけに、事が面倒でござんす」

「ついこの間も、大旦那が、山路太夫を引くの引かぬので、大騒動があったばかりじゃアないか」

「それに引かえ、白子屋さんは風儀がいいので、評判です。御主人方がみな真面目だから、奉公人の隅々まで、キチンと筋目が立って居りますねえ。番頭の忠八さん、清兵衛さんはじめ、彦八さんや伊介さんまで、一度でも女郎買の話をするのを、聞いたことがありゃアしません」

「でもこうして、若い者を大ぜい使っていると、それが一番心配さ」

お常は、自分で団扇を遣うような振りをしながら、清三郎のほうへ、風を送ってやっている……。

三

台箱の中へ、櫛や刷毛を仕舞いだすのを見て、
「オヤ、清さん。もう帰支度かえ。もつとゆっくりして行つて頂戴な」

と、お常は引きとめる。

「まだ、二軒ほど、廻らなくっちゃアならねえんです」
「ほんとに、清さんは商売熱心さね。でも今日はみんな

留守なんだよ」

「そうですつてね。さっき、伊介さんに聞きましたよ。

お嬢さんも御一緒ですか」

「あれはお父ッあん子だから、お供が好きなの。この暑いのに、堀の内まで行くつて云つて……あたしは、御免蒙りましたよ」

「堀の内までは、道のりでございますね。お供は？」

「忠八がついてゆきました」

「それはお楽しみだ」

というのをお常は、聞き咎めて、

「オヤ、それじゃア清さんは、駒子と忠八が何かおかしいとお思いかえ」

「ま、滅相な……さっきも申上げた通り、風儀のきびしい白子屋さんのことだから、どうすべつても、ころんでも、間違ひなんぞ、ありゃアしません」

「それを聞いて、安心だけれど……」

清三郎は、剃刀をしまいながら、

「これで、若い娘さんをもつと、何ンのかのと、御心配でございますねえ」

「何しろ、一人娘だから」

「でも、おかみさんが若いから、母子おやこというよりは、まるで姉妹にしか見えません」

「清さん。お世辞が上手じやうずだよ」

「何に、お世辞じゃありません。そうして髪を上げていらうしやると、駒子さんと幾つも違わねえ姉さんです」

「女は幾つになつても、若いと云われると嬉しいよ」

とニコリ。そして少し居ざる拍子に、薄ものの裾すそが割れて、白いむっちりした腓この肉がのぞく。お常はそれを意識してやっているのかどうかはわからない。然し時時大胆に、裾をまくったり、諸肌もろはだをぬいで見せたりする。

「おかみさんこそ、お幾つなんです」

「ずるいよ、清さんは。自分の年を云いもしないでさ」

「一人者の髪結に、年なんかありませんさ」

「ホホホ。清さんがそう云うなら、あたしだって年はない。三十六でとまりなの」

「とまりと仰有おちしると」

「三十六から先きは、年を取らないつもりなのさ」

「では、仰有おちしる通り、三十六にしておきましょうが、三十六にも見えません」

「あら、ほんとかえ」

「せいぜい三十二位にしか……」

「清さん……ありがとよ」

お常は鏡台に向き直つて、三十二と云われる自分の顔を覗いた。そしてますます、行儀の悪い姿勢になった。

「清さんは、まったく、いいことを云ってくれるよ。白子屋の風儀が堅いのも、ありがたいし、私がいつまでも若いのも、一番うれしいことだものね。清さん、おごらなくっちゃアね。清さんは何が一番、欲しいの」

「さア、何ンとも申上げられませんが……お華客おかくさまには、こうして始終、呼んで戴くのが、一番でございます」

と、清三郎は慎重だ。然し、欲しいものは沢山ある。

実は鑑札も他人名義である。これを早く自分名義にして、出来れば廻り髪結より、一軒床店きこやがもちたい。が、そんなことはまだ、誰にむかつて、オクビにも出したことがない。

四

さて、時は享保五年八月、暦の上では、とうに秋だが、残暑はまだきつかった。

所は日本橋新材木町の白子屋。享保というところ、所謂徳川の中期で、元禄からは、ざっと十二年ばかり新しい。元禄が十六年で改元して、宝永になり、それが七年で正徳。正徳が五年で享保になった。

新材木町というのは、新材木町に対して出来た町だが、新材木町が日本橋の西河岸を南へ下って、江戸橋を渡らず、その袂から、海賊橋（今の海運橋）のほうへさかのぼる堀割一帯の細長い河岸つぶちであるのに対して、江戸橋を渡って、照降町をぬけ、親父橋から、和国橋をつなぐ入堀の南河岸沿いを新材木町と称する。

その堀割が和国橋をくぐった所で、行留りになるところから、そこを堀留町と云った。材木商白子屋は、この新材木町にあって、大きな土蔵のある構えであった。「江戸真砂六十帖」と云う本に、

「新材木町、稲荷新道の角に、白子屋庄三郎といふ材木御用聞なり。身代よろしくて、町内の随一なり」

と出ているのが、それだ。然し、お常は問屋店と住居とが一つであるのが何かにつけて不便でならない。出来れば、店と住居を別にしたい。住居のほうは、自分と駒

子と、気に入りの女中二人位で暮したい。

といって、商売を夫の庄三郎にまかせ、自分は遊んで暮そうというのではない。お常はもともと、商売には、大そう熱心だ。庄三郎をさしおいて、山から木を買ったり、また売ったりもする。真面目一方の庄三郎より、度胸がいいから、お常のほうが商売上手でもある。荷主に對しても社交的であるから、庄三郎に話すよりも、お常と商談するほうが、話がわかるとされた。

かねがね、お常とすれば、堀留の川では、材木の置場としては、せまいと思っている。もっと沢山の材木を入れ、それを川一面に流しておきたい。

材木の荷主を、「山方」と称する。山方は、出荷しても、すぐには、金にするわけではない。半年々に、仕切つて、清算する。中には一年勘定というのものもある。しかも、相場をきめずに、材木問屋へ渡すのだから、かなり都合のいい商法だ。

お常はそこへ目をつけて、思わくをやることも心得ている。つまり、いくら沢山の材木を仕入れても、すぐ金には要らぬのだから、川一面に浸けておいても、かまわない。そのうちに、大火でもあれば、相場が暴騰するから、

濡れ手に粟のぼろい儲けは、いくらも出来る。

その点、日本橋も川や入堀が多いが、深川へ行けば、もっと多いから、段々には、新材木町を売場、深川を置場にして、営業所と貯蔵場とを分け、その上、住居は住居として、うるさい番頭手代の目を避けて、ゆっくり暮したいというのが、お常の理想であった。

「清さん……この間も頼んでおいた住居の話はどうになりました。どこか、いい家は見つからないかえ」

「それがねえ、この通り立てこんでいる日本橋では、おかみさんの氣に入るような贅沢なお住居はありませんよ。いっそ、新しくお建てになっちゃアいかがです。それこそ材木なら、お手のものじゃアござんせんか」

「それもそうだねえ。家を建てるに都合のいい土地があるかしらん」

「それなら、それで、また当って見ましょうよ」

清三郎は最後にくせ直しの水を、表へ捨てようとして、障子をあげると、店のほうで、にわかに賑やかな女の声。堀の内から、駒子が帰ってきたのである。

五

「オヤ、お歸りでございますよ」

と、清三郎は云った。それと同時に、台箱をさげて立上った。

「それじゃア清さん。また明日、撫でついてもいいから来ておくれよ」

「何ん時がよろしゅうございましょう」

「そうさね。明日の夕方は、ちいっと面倒な取引があるから、午すぎには廻ってきて頂戴な」

「へい、かしこまりました。おかみさん、ちょっと——」

清三郎は、鬢かきを取って、もう一度、お常の鬢髪のはつれを直す。これが髪結の愛嬌でもある。

そこへ、廊下ではバタバタという足音がして、

「おッ母さん。只今」

はいって来た駒子は、菫の牡丹だ。清三郎と顔を合すなり、微かな動揺をほのめかしたが、すぐ元へ戻って、

「オヤ、清さん、来ていたの」

「へい。忠八さんの撫でつけに参ったんですが、今日はお供だったそうで——」

「忠八も気にしていましたよ」

「堀の内は、面白うございましたろう」

「暑いから、お鳥目もようめをはずんで、駕籠かごを飛ばしたんですよ、おッ母さん」

「まアお転婆てんぱな。駕籠から落ちたら、どうします」

清三郎はそれを機に、

「それじゃアごめん下さいまし」

と、立ってゆく。

「お父さんは？」

「四谷よつやまでは、一緒に帰ってきたンだけれど、麴町こうじまちの普請場へ寄るからといって、見付みづけのところで別れました」

「さぞ暑かったろうって、今も清さんと噂していたのさ」

「でも、下町したまちはまだ残暑でうだるようだけれど、お祖師そつさまの近くまでゆくと、もうすっかり秋ですよ」

「まア、そんなに違うのかねえ」

「こんどはおッ母さんもいらッしゃいよ」

「その代り、日帰りなんざ出来ません。大木戸おきどか追分おきわけで、一晩泊ってゆくなら、いいけれど……」

「どうせ一晩泊るなら、私は江の島へ行ってみたい」

「昔とちがって、白子屋も商売がひろくなったから、おッ母さんはとても遊んではいられません」

お常おとこはさつきとはうって変って、口やかましい母である。駒子こまはダダをこね、

「それじゃア、また忠八と行く」

「いけません」

「あら、どうして？」

「いくら、生真面目な忠八でも、世間様の口に木戸は立てられぬ」

「ホホホ。あの忠八が、何ンで私を……おおかし、ホホホ、アハハ、いくら私が莫迦ばかでも……まさか奉公人なんぞとは、アハハ」

と、駒子は腹をかかえて笑う。その忠八が、さっそく、道中着を店着に着換え、子持こもち縞しろの単ひとえに、黒の角帯というお店者の風態ふうたいで、廊下を静かに渡ってくるなり、敷居の向うにべったり坐って、

「お内儀さま。只今、戻りました。今日は私めにまで、お駕籠を頂戴ていだいいたしまして、ほんとにいい保養をさせていただきました。大木戸おきどの鰻屋うなぎやで、おいしい鰻を御馳走になったりして……みんな、旦那様、お内儀さまの思召